

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月24日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03127

研究課題名(和文)中央アジアとインドにおけるアレクサンドロス遠征路の歴史学的地誌学的研究

研究課題名(英文)A Historical and Topographical Study on Alexander's Expedition in the Central Asia and India

研究代表者

森谷 公俊(Moritani, Kimitoshi)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：60183662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：紀元前329年から326年までのアレクサンドロス大王遠征路の実地調査を行った。ウズベキスタン(古代ソグディアナ)では、アムダリヤ川の渡河点および正妃ロクサネの故郷とされるクズルテパ遺跡を調査した。最大の課題は地元住民が立てこもった3つの岩砦の特定であったが、現地の状況により登山は不可能で、完全な実証には至らなかった。

パキスタン(古代インド)では北西辺境州において、スワート地方の住民が立てこもったピールサル(古代アオルノス)へ2度の日帰り登山を行い、現場を精査して戦闘状況を復元できた。またインダス川下りの行程を可能な限りたどった。大王の遠征地域がいかに豊かな多様性を持っていたかが認識できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代ソグディアナはアレクサンドロス遠征路の中で最も未解明の部分が多い地域だが、現在はウズベキスタンとフランスの共同研究が進み、現地調査にもとづく古典史料の再解釈が試みられている。その成果と現地の状況をじかに知ることで多くの示唆が得られた。パキスタンのスワート地域での調査は、ハザラ大学との共同研究で大きな成果が得られた。特にピールサルの学術登山は1920年代のスタイン以来約90年ぶりで、戦闘経過を正確に復元できた。インダス流域の調査は限定的だったが、マッロイ人との戦闘地域ではタランバの遺跡を再発見した。大王の遠征地域の豊かな多様性を知ることは、グローバル時代を乗り越える視点を提供してくれる。

研究成果の概要(英文)：I made a field survey of the route of Alexander's Expedition from 329 to 326 B.C. In Uzbekistan (ancient Sogdiana), I examined the crossing point of Amu Darya, and the site of Kyzultepa, supposed hometown of Roxane, queen of Alexander. I tried to identify the three Rocks which the native people occupied in resistance to Alexander, but hindered by the political and geographical situation, could not accomplish my purpose. In the KP Province of Pakistan (ancient India), I climbed Pir-sar (ancient Aornos) where the native people in Swat took refuge, examined its terrain in detail, so I restored the process of the battle engaged between the Macedonian troops and the native Indians. Then I followed the route of Alexander along the Indus from the Jelum (ancient Hydaspes) river to Tatta, the mouth of the Indus, as possible.

研究分野：西洋史学

キーワード：古代ギリシア史 アレクサンドロス大王 古代マケドニア王国 古代インド 古代ソグディアナ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アレクサンドロス大王の東方遠征の中で、古代ソグディアナ（現ウズベキスタン）での遠征は古典史料の記述の相違が大きいため、現地調査をふまえない欧米研究者の議論ははなはだ錯綜してきた。また古代インド（現パキスタン）北西部、スワート地域での遠征路も、1920年代にスタインが調査して以来、学術的な現地調査は行われていない。今後の研究の前進のためには、両地域における現地調査が不可欠である。

2. 研究の目的

ウズベキスタンとパキスタンで現地調査を行ない、古典史料の記述と照合しながら主要な戦闘の場所と経過を特定することが、本研究の最大の目的である。まずウズベキスタンでは、地元住民が立てこもって大王に抵抗した3つの岩砦（コリエネス、アリアマゼス、シシミトレスの各岩砦）を特定する。さらにアマダリヤ川の渡河点、大王の正妃ロクサネの故郷を可能なかぎり調査する。パキスタンでは、スワート地域の住民が避難したピールサル（古代アオルノス）に登山して、戦闘経過を復元する。またインダス川下りの行程をたどりながら、主な戦闘地域を実地調査する。

3. 研究の方法

ウズベキスタンでは国立歴史博物館の副館長を通じて、考古学者のゴリン氏を紹介してもらい、岩砦の調査地点が集中するデルベンド方面の訪問に同行していただいた。それ以外の調査地点は、ウズベキスタン歴史学界の重鎮であるルトヴェラゼ教授の翻訳本を手がかりとした。

パキスタン北西部では、ハザラ大学のザヒル准教授（考古学）との共同研究の形を取り、北西辺境州政府から許可を得ることができた。現地の移動と登山にはザヒル准教授の仲間と地元協力者が同行したほか、武装警官がつきっきりで警護した。パンジャブおよびシンド州の調査には、現地旅行会社を通じて運転手付きの車と経験豊かなガイドを雇い、遺跡を訪問しながらインダス川流域をたどった。

4. 研究成果

ウズベキスタンにおける調査

前329年、アレクサンドロスはアマダリヤを越え、ソグディアナに侵攻したが、地元の貴族スピタメネスの指導下に各地で住民が反抗し、丸2年にわたって困難な平定戦を強いられた。大王伝の記述はとりわけ岩砦攻略戦について曖昧で、互いの相違も多いため、欧米の学者の解釈も錯綜している。しかるにソ連崩壊後の1990年代から、ウズベキスタンとフランスの共同調査が進んでおり、フランスの学者ラパンが長大な論文を発表して、現地調査にもとづく古典史料の再解釈により、新しい再構成を提示している。そこでラパンの説に依拠し、彼による岩砦攻略戦の復元を今回の実地調査と照合することにする。



【デルベンド周辺での調査地点】

問題となるのは次の3つの岩砦である。

(1) コリエネスの岩砦 = キズクルガン山

前327年初春、大王はコリエネスの宴会に招かれ、そこでロクサネを見初めた。よってコリエネスが大王に臣従したのはその前年でなければならない。前328年初め、アレクサンドロスは軍を5つの部隊に分け、ソグディアナ東部を平定してから西に進路を転じ、パライタカイ地方に侵攻した。アリアノスによると、マケドニア軍はコリエネスの岩砦を包囲して、周囲の深い谷に杭を打ち込み、足場を組み立てた。矢玉が岩砦に届くようになると住民は狼狽し、主張のコリエネスは降伏したという(4.2.1~9)この岩砦は、デナウの北西21キロに位置するシナ村からさらに北北西へ2キロほどのキズクルガン山に適合する。頂上は平地から330メートルほどで、私たちは南から山を望むにとどまったが、地元の話では山の北側に川の本流があるという。

(2) アリアマゼスの岩砦 = サリマス山東側

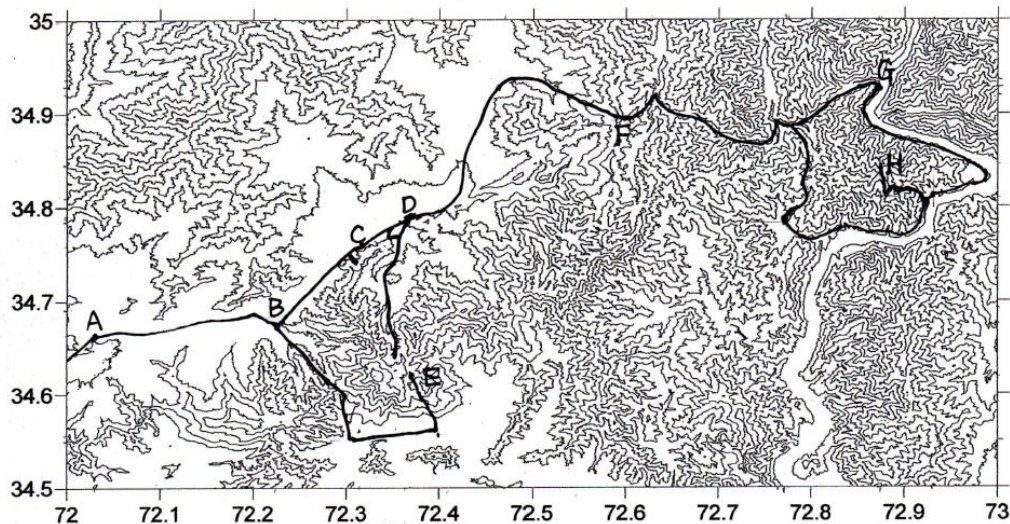
クルティウスはアリアマゼスとシシミトレスの2つの岩砦に言及しているが、ラパンは他の大王伝と照合して、クルティウスは2人の名前を取り違えていると結論した。よって急流と岩砦に守られた狭隘な岩山に立てこもったのはアリアマゼスである。アレクサンドロスは防壁を突破して前進し、木を伐り岩を集めて深い峡谷を埋め立てた。この結果アリアマゼスは降伏した(8.2.19~33)。ウズベキスタンの歴史学者ルトヴェラゼはこの岩砦をデルベンドのすぐ西のスズタグ山に、防壁をその近辺のブズガラハナ峡谷に同定している。しかし後者のすぐわきは平地で幹線道路が通っており、敵の侵入を防ぐには適しない。スズタグ山とシュロブ川との関係を調査したかったが、ちょうど正面に軍の検問所があり、テルメズ方面から隘路を通る車を入念にチェックしているため、付近を歩くことも写真を撮ることもできなかった。これ以外の候補地は、デルベンドのすぐ北に延びるマチャイ峡谷で、ラパンはマチャイ川に接するサリマス山東側をアリアマゼスの岩砦に同定している。この峡谷をしばらく車で進んだが、山を見張らせるサリシャト峠には時間の都合でたどり着くことができなかった。

(3) シシミトレスの岩砦 = カブカグリ = アウジ山

アリアノスとクルティウスによると、とある難攻不落の岩山に立てこもった地元民は、大王に向かって「アレクサンドロスは空を飛べるのか」あるいは「翼のついた兵士を探してこい」と豪語したという。そこで大王は300人の兵士に絶壁に登攀させ、彼らが頂上を占拠すると、相手に向かって「翼のある兵士が山を占拠した」と告げた。主張のアリアマゼスはこれを見て狼狽し、降伏したところ、大王は彼を処刑した(アリアノス4.18.4~204、クルティウス7.11.1~29)。この岩砦に適合するのは、デルベンドの北西、アクラバト峠の北にあるカブカグリ=アウジである。周囲の山々から孤立して高原に屹立し、頂上は平坦だ。舗装道路が通じておらず、車で接近できないため、幹線道路から写真を撮るにとどめた。ここはヒサル山脈のすぐ西側で、この山脈を東西に抜ける道を支配する位置にある。

以上のように、3つの山のいずれも登山はおろか周囲を走破することもできず、明確な結論を出すには至らなかった。ただ大王伝の再解釈に照らして、ラパンの同定の蓋然性は高いと言えるにとどまる。

スワートにおける調査



【2017~18年 スワート調査の全行程】

- | | | | | | |
|---|----------------|---|--------------|---|---------------|
| A | チャクダラ (古代マッサガ) | E | エラム村 | B | バリコート (古代バジラ) |
| F | シャングラ峠 | C | ウデグラム (古代オラ) | G | ベシャム |
| D | ミンゴラ | H | ピールサル | | |

(1) ピールサルの同定

前327年晩秋、アレクサンドロスはパキスタン北西部に侵攻し、スワート川沿いのバジラ(現バリコート)とオラ(現ウデグラム)を包囲した。オラが陥落すると、「バジラの住民は、自分たちの置かれた状況に絶望し、深夜に町を脱出して岩山に逃げ込んだ。それは他の現地民たちの行動と同じであった。彼らも町々を捨て、アオルノスと呼ばれるこの地方の岩山に全員が逃げ込んだのである」(アリアノス4.28.1)。こうして我々は、アレクサンドロスのインド遠征に

おけるもっとも印象深い場面、アオルノスでの戦闘へと移ることになる。アオルノスの地形について、古典史料は次のように述べている。

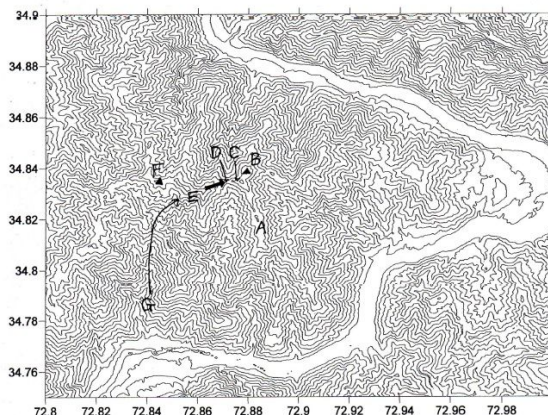
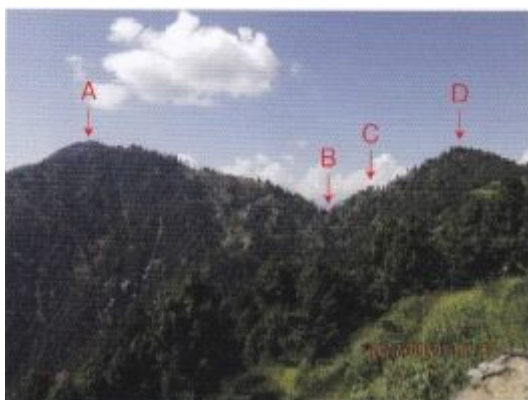
「岩山の周囲は約 200 スタディオン[約 36 キロ]、その高さは最も低い場所でも 11 スタディオン[約 2000 メートル]あり、そこへ登るには人が作った険しい一本道しかない。岩山の頂上には澄んだ水が豊富にあり、泉が湧き出ており、水はこの泉から流れ出すのである。さらに森もあれば立派な耕地もあり、土地は 1000 人もの人が耕すのに十分な広さだという」(アリアノス 4.28.3)。「[岩山の]表面は平坦で完全な円形をなしている。南側はインド最大の川であるインダス川が岸を洗い、他の面は深い渓谷と近寄りがたい断崖に囲まれている」(ディオドロス 17.85.3)。

スタインは 1926 年にピールサルに到達し、ここが古代アオルノスであることを確認した。それ以降、この説が広く受け入れられている。2017 年 9 月 7 日、私たちはザヒル准教授とともに総勢 14 人でピールサルへの第 1 回登山を行った。2 台の車に分乗して 1 時間半ほどで標高 1759 メートルの駐車場に着き、そこから徒歩で標高約 2200 メートルの頂上に着く。そこは一面に牧草が生い茂り、牛や馬、羊が放牧され、広い池もある、のどかな高原だった。牧草地から北には耕作地もあり、数千人の住民が避難して一定期間生活するのに絶好の条件を備えている。こうして私たちは、スタイン説の正しさを確信した。さらに北へ歩いたが、森に阻まれ、標高 2294 メートル地点で引き返した。

(2) 戦闘経過の復元

アリアノスによる戦闘経過は次のとおりである(4.29.1~30.4)。

1. 数人の現地住民が投降し、彼らの案内でプトレマイオス(後のエジプト王)指揮下の先発部隊が攻撃拠点を確保した。
2. 翌日に大王率いる本隊が進発したが、現地民の抵抗で前進できず、その翌日、大王は先発隊と同じ道を登り、現地民の抵抗を排除してプトレマイオス隊と合流した。
3. アレクサンドロスは兵士に各々 100 本の杭の伐採を命じ、ウーナ山からピールサルに向かって土壇を建造し始めた。初日に 1 スタディオン分が完成し、2 日目には土壇の先端から投石隊が石弾の投射を開始した。
4. 土壇の建造から 4 日目に、マケドニア軍が小さな丘を占拠した。大王はこの丘に土壇を連結させるべく工事を続けた。
5. これを見て現地民は岩砦の明け渡しを申し出たが、時間を稼いで逃走を図った。大王は相手の計画を察知し、頂上を占拠したのち、退却中の現地民を殺戮した。それから岩砦を守備隊の駐留地とした。



【写真の説明】

- A マケドニア軍が占拠したウーナサル
- B プーリマール峡谷 (2220m、N34° 50' 04" E72° 52' 18")
- C マーシュルン鞍部 (2290m、N34° 50' 05" E72° 52' 24")
- D バルサルの最高地点 (2416m、N34° 50' 05" E72° 52' 39")

【地図の説明】

- A ピールサル B バルサル C マーシュルン鞍部
- D プーリマール峡谷 E 小ウーナ F ウーナ山
- G プトレマイオス隊およびアレクサンドロス本隊の推定出発地点

以上の経過を調査結果と照合する。

プトレマイオス隊が占拠した地点を、スタインはピールサルの西側にそびえるウーナサル南面の小ウーナに特定した。ピールサルとウーナサルの間には、プーリマール峡谷という天然の障害物がある。アレクサンドロスが土壇を建造した目的は、敵側の斜面をマケドニア軍の飛道具の射程距離に入れることであった。2018年5月2日、私たちはこの峡谷の現地調査を試みた。前年と同じ駐車場から頂上に向かって新しい道ができており、おかげで標高 2066 メートル地点まで車で登ることができた。そこから徒歩でピールサル西側斜面の細い道をたどり、プーリマール峡谷の底部に到達した。底部は非常に狭く、平らな面はごく限られている。南北はいずれも険しい斜面で、西へはウーナサルの、東へはピールサルの斜面が上方に延びている。GPS によれば、プーリマール峡谷の底部は標高 2220 メートル、バルサルの頂上は 2416 メートルで、約 200 メートルも高い。アレクサンドロスはこうした地勢に対応して、峡谷をまたぐ土壇を建造したのである。

4 日目にマケドニア軍が占拠した丘はマーシュルン鞍部と呼ばれ、ピールサル側の斜面から突き出ている。標高 2290m で、プーリマール峡谷の底部より約 90 メートル高く、インド人はここから容易にマケドニア軍を攻撃することができた。スタインによれば、マーシュルン鞍部とウーナサル側の同じ高さの地点との間隔は 500 ヤード、当時のギリシア人の飛道具の射程は 300 ヤードだった。ピールサルの攻略にこの丘の占領が不可欠だったのは明白である。さらにアレクサンドロスが土壇をこの丘に連結させるべく建造を続けたのは、マーシュルン鞍部を占領した少数の兵士を孤立させないためであった。

インド人への攻撃の前に、アレクサンドロスはピールサルの最高地点であるバルサルを占領した。バルサルの最高地点は標高 2416 メートルで、マーシュルン鞍部より約 100 メートル高い。頂上への道は急峻なので、ザヒル准教授に携帯用 GPS を託し、バルサルの頂上を通過してもらった。以下はザヒルの報告に基づく記述である。

バルサルの頂上付近で、30 メートル×30 メートルほどの比較的大きな構造物の跡を見ることができた。それは今では鬱蒼と茂る植物と松の木々に覆われ、至るところ遺跡の盗掘人によって荒らされている。構造物の作りは、この地方の伝統的な様式よりもギリシア様式によっている。幅 1 メートルほどの大きな囲壁が周りを取り囲み、中には比較的小さな部屋が複数ある。すぐ近くにはいくつかの大きく平たい岩があり、おそらく砦だと思われる。しかしその目的と機能を知るためには、さらなる発掘が必要だ。

【付記】

等高線図の基礎データは ALOS 全球数値表モデル(DSM)“ALOS World 3D-30m” (AW3D30)、ソフトは Surfer12 である。

【使用した文献】

- A・スタイン『アレクサンダーの道 ガンダーラ・スワート』(谷口陸男・澤田和夫訳)白水社、1984年
- E・ルトヴェラゼ『アレクサンドロス大王東征を掘る 誰も知らなかった足跡と真実』(帯谷知可訳)NHK ブックス、2016年
- C.Rapin, 'On the way to Roxane 2. Satraps and hyparchs between Bactra and Zariaspa-Maracanda', in J.Lhuillier, N.Boroffka (eds.), *A Millennium of History; The Iron Age in southern Central Asia (2nd and 1st Millennia BC)*, Berlin, 2018, 257-298.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

Kimitoshi Moritani and Muhammad Zahir, 'Alexander the Great at Aornos (Mount Pir-Sar), District Shangla, Khyber Pakhtunkhwa Province, Pakistan: Report on Historical and Archaeological Field Investigations (2017 – 2018)', *Pakistan Archaeology* (in print) (査読あり)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：鈴木 革
ローマ字氏名：Kaku Suzuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。